

オーストリアにおけるアレヴィーとその音楽
一人の移動が宗教的自文化表現とその継承にもたらす影響

Alevi and its Music in Austria:
Effects of *Alevi*'s Migration on their Religious Self-Cultural Expression and its
Transmission

鈴木 麻菜美 SUZUKI Manami

研究動機

本研究はイスラムの流れを汲む宗教グループ「アレヴィー」に焦点を当て、音楽や舞踊などの文化表現の実践に社会的環境が与える影響と関係性を明らかにしようとするものである。具体的にはヨーロッパ、特にオーストリアの移民コミュニティのアレヴィーの活動に注目し、ディアスポラという社会的環境の変化においてアレヴィーの音楽活動がどのように展開しているのかを精査した。

アレヴィーとはトルコやバルカン半島に分布する宗教グループの一つで、イスラム教スンニ派が多数を占めるトルコにおいては宗教的マイノリティでもある。アレヴィー独自の儀礼であるジェム *cem* では、民俗的な撥弦楽器であるサズ *saz* を伴奏に、重要な宗教的エピソードや知識、哲学を含んだ詩による歌(デイシュ *deyiş*)が演奏され、舞踊のようにも見える旋回(セマー *semah*)が行われる。音楽を祈りの場に用いることを忌避し、また舞踊も俗的な行いとして祈りの場からは遠ざけてきたイスラム教の多くの宗派の考え方からすれば、アレヴィーによる歌舞音曲が中心となった儀礼は異質であり、アレヴィー、彼らが実践する文化表現、そしてその二つの間の関係性はしばしば研究対象として取り上げられてきた。またアレヴィーは、儀礼中に用いるサズや歌という音楽的要素を儀礼の外、日常生活においても重視し身近に置いてきたことから、吟遊詩人を含む音楽家や音楽教師、楽器製作者を輩出し、今日まで活躍してきたことでも知られている。同時に、トルコにおける彼らの社会的な立場も注目される場所である。宗教的マイノリティである彼らは、公的には一介の宗教グループとして認められていないなど、しばしば不遇の立場に置かれてきており、そのことは彼らの宗教的自文化表現の実践にも影響を与えている。

そのアレヴィーは、トルコ東部から中部にかけて居住してきたが、経済的及び社会的理由から1950年代以降イスタンブールなどの国内の大都市へ、1960年代に労働協定が結ばれてからはヨー

ロッパの都市へと、移民として流出した。本研究で考察対象の中心として据えたのは、そのようなヨーロッパの国の一つである、オーストリアにおけるアレヴィーの事例である。

オーストリアを調査地として注目した点の一つには、この国の移民を取り巻く環境がある。オーストリアには広大な領土を有したハプスブルク帝国時代の移民も含め、現代に至るまでさまざまなルーツの移民が見られ、その移民の中にはアレヴィーを含むトルコからの移民もいる。当該国にはそのような移民を対象とした制度や法が備えられており、それは歴史的な経緯により多民族を国内に擁してきたことによる。また、オーストリアの言語や宗教をはじめ、その文化圏はアレヴィーの故郷であるトルコからは離れており、そのことがアレヴィーを取り巻く周辺環境に変化をもたらすことが予想される。取り巻く環境の変化がアレヴィーの活動や自文化表現にどのように影響を及ぼすのかについて考察するうえで、その環境は注目すべきであると執筆者は考えた。

また、オーストリアにおけるアレヴィーの「マイノリティ」としての立場にも注目した。「マイノリティ」、すなわち社会的少数派とは、アレヴィーのような宗教や人種、民族、言語、ジェンダーなど様々な観点から特定される。マイノリティとして置かれた環境やマイノリティを取り巻くマジョリティ（社会的多数派）からの影響、時にはマジョリティとマイノリティが相互に影響し合うことにより、音楽や舞踊など彼らそれぞれが持つ文化表現に独自の展開が生まれることから、「マイノリティと音楽」は研究対象としてしばしば注目される。アレヴィーはもとよりトルコにおける宗教的マイノリティであったが、トルコからの移民、すなわちオーストリアでのマイノリティの一部として生活するなかでは、マイノリティに内包されたマイノリティという環境にある。その環境はいかにも彼らに困難をもたらすように察せられるが、実際にはどうなのか、明らかにしたいと執筆者は考えた。

この事例の考察を通して、アレヴィーの宗教的自文化表現と社会的環境の関係性を明らかにすることが、本研究の目指すところである。

問題提起

本研究では、宗教的自文化表現に周辺環境の変化がどのように影響するのか、という点に注目した。

宗教にまつわる文化は、多くの場合、人々の生活に根差してその一部として培われるものである。そのため、宗教的な儀礼やそれに伴う音楽や舞踊などの芸能に展開があったときには、その要因としてそれを取り巻く環境の変化を指摘できる場合がある。アレヴィーもまた、儀礼やその

中で実践される音楽はトルコの環境や文化に根差したものである。そのためヨーロッパへのディアスポラや移住先での音楽の実践において、そのような展開があるのか、どのように維持しているのかについて、執筆者は疑問を抱いた。この博士学位論文において問いかける二つの問題提起はその疑問に基づいている。

一つ目の問題は、「移民コミュニティで形成された宗教的な場でのアレヴィー音楽の「展開」と「維持」」について、どの部分にどのように現れているのかである。儀礼はアレヴィーがアレヴィーであることの軸となる文化表現実践の一つであり、彼らの宗教的アイデンティティを示すものとして欠かすことはできない。アレヴィーの宗教音楽や音楽を伴ったセマーが行われるのもこの儀礼の場である。一方で、儀礼が行われる宗教的空間、音楽の実践者と聴衆の意識の違いなど、移住によって変化があるのではないかと推察される。この問題については、コミュニティの中で実践されているアレヴィーの音楽とセマーの内容を、儀礼の場であるジェムやそのほかの場で調査し、その意義や特徴を分析した。具体的には、儀礼での楽器やデイシュの演奏、セマーの実践、実践に対する聴衆の反応の観察と分析から、その変化の有無、意義などを探った。

二つ目は、サズを伴奏に使った歌唱や儀礼の中で舞踊的に行われる旋回のセマーなどのアレヴィーの自文化表現が、どのように継承されているかである。音楽を含む文化表現の次世代への継承は、その文化的アイデンティティを維持するために重要なタスクと言えるが、周辺環境の変化によって文化表現の継承の方法や継承の難しさも変化すると推測される。この問題については、アレヴィー・コミュニティ内外で行われているアレヴィーについての宗教の授業、サズやセマーの教室での観察とインタビューを行うことで、文化継承の内容と意識を調査した。加えて、ディアスポラ・コミュニティでアレヴィー文化の教授を受けた若者たちによる活動の例として、アレヴィーの若者による文化祭にも注目した。

論文の構成

本論文は四部から構成されている。

「第 I 部 移民と文化表現」では、本論文の主軸の一つである移民について考察した。「第 1 章 移動する人と音楽」では、移民、ディアスポラという単語の定義と移民によって起こり得る文化表現への影響について、先行研究から検討している。「第 2 章 トルコ人による国外への移民」では、トルコ以外に居住するトルコ系移民について、移民の社会的背景と共に概観した。「第 3 章 オーストリアのトルコ系移民とその他の移民コミュニティ」は本論文の対象地域であるオー

ストリアに焦点を当て、オーストリアの移民とその理由を歴史的な背景から概観したのち、オーストリア国内のトルコからの移民について、とりまく社会的環境から検討した。

この第Ⅰ部での考察により、オーストリアでアレヴィーが置かれている環境の特質の把握を目指した。

「第Ⅱ部 アレヴィーと音楽」では、本論文のもう一つの主軸であるアレヴィーを考察した。「第4章 アレヴィーについての概要」では、宗教グループとしてのアレヴィーの特徴について検討した。まずアレヴィーを表す名称、構成する民族、アレヴィーの信仰内容の特徴、その信仰内容に影響を与えている「イスラム教」と「スーフィズム」などについて整理し、最後にアレヴィーを特徴づけているものの一つである儀礼ジェムの内容などをフィールドワークによって得た情報を交えて検討した。第4章を踏まえたうえで、「第5章 アレヴィーと音楽」ではアレヴィーの儀礼での音楽の使用について楽器とデイシュから、また音楽家としてのアレヴィーを考察し、音楽とアレヴィーの関係を精査した。またここで音楽と並んでアレヴィーの特徴的な文化表現であるセマーについても論じた。

第Ⅱ部での考察や情報は、第Ⅲ部の中でオーストリアのアレヴィーによる宗教的自文化表現の実践や継承において、何が特徴としてあげられるか、何を意識しているかを検証するうえで、重要な下地となっている。

「第Ⅲ部 オーストリアのアレヴィーと自文化表現」は本論文の核となる部分として、第Ⅰ部、第Ⅱ部での情報、検討を踏まえたうえで、オーストリアにおけるアレヴィーの自文化表現の特徴を分析・考察した。「第6章 ディアスポラ・コミュニティのアレヴィー」では、オーストリアの中でアレヴィーの自文化表現の場がどのように形成されているかについて考察した。「第7章 オーストリアのアレヴィーによる音楽的活動」では、オーストリアのアレヴィーによる儀礼での文化表現の実践、継承の場と内容について論じた。

「第Ⅳ部」ではⅠ部からⅢ部までで提示し考察した情報を整理し、さらに詳細な分析を行い、これらを「結論」で総括した。

考察と結論

一つ目の問題である「移民コミュニティで形成された宗教的な場でのアレヴィー音楽の「展開」と「維持」については、どの部分にどのように現れているのか」に対する解答として、ジェムにおけるアレヴィー音楽とセマーから以下のように提示した。

まずオーストリアのジェムで演奏されるアレヴィー音楽に関して、伴奏楽器、演奏される回数とタイミング、歌われる言葉や詩の内容などは、トルコでの実践を維持していると判断した。デイシュやサズの演奏など、トルコで実践されていたアレヴィー音楽をオーストリアに持ち込むことが可能だった要因は、用いられる楽器の特徴や伝承の方法などアレヴィー音楽のあり方に由来する。

一方で、ディアスポラがアレヴィー音楽に影響を及ぼしたと見られる点が二点ある。一つはジェムで歌われるレパートリーの縮小で、二点目は聴衆である信徒によるレスポンスの希薄さである。デイシュを聴くことでレパートリーを習得し、周囲の信徒からレスポンスの仕方を吸収する場であるジェムの回数が、ディアスポラ・コミュニティの中で減少したことが、その要因であると執筆者は考えた。そのような状況のジェムでは宗教的な場の高まりもまた薄くなる傾向にあり、歌い手や周囲の信徒がともにデイシュを歌い、「高まりを共有する」ことがジェムの重要な側面であることを改めて理解した。

セマーについては、オーストリアでも、セマーは信徒同士で行うことによって場の高まりを共有する役割を持つものであり、アレヴィー文化を象徴するものとしても重要視されている。オーストリアのジェムで見られるセマーを論文中では「参加型」と「上演型」と分類した。この二つからはディアスポラ状態の中でセマーに起こっている事象を読み取ることができる。

まず、セマーのレパートリーの限定化である。参加型のセマーは信徒全員で共有できる一方で、容易に実践可能なこの型がジェムのみならずセマーを学ぶ場においても選択されることで、それ以外のセマーが回られる機会を失うという弊害を生んでいる。また、ジェムの機会が少ないことによりセマーを目にする機会が減ることも、レパートリーが限定される一因と言える。

これを補完する役割を果たしていると考えられるのが、上演型のセマーの実践である。ただ習得するのみならず、アレヴィー・コミュニティにおいて最も重要と言えるジェムの場で衆人環視のなかジェムを実践するという、ある種の目標を見据えて行うことで、セマーの芸術的熟練度をより高め、幅広いレパートリーを習得するモチベーションを生むことにもつながっていると執筆者は考えた。このタイプのセマーは儀礼の一部としてのみならずパフォーマンスとしても注目されており、オーストリア生まれの世代にセマーを習得することへの興味を抱かせるきっかけとな

っている。一方で、表面的な華やかさに目を奪われ精神的な意義が後回しになる可能性も指摘することができる。

二つ目の問題「サズを伴う歌唱やセマーなどのアレヴィーの自文化表現がどのように継承されているか」については、サズ演奏とセマーの継承、オーストリアにおける新しい継承の場という3つの項目から結論を導いた。

まずサズ演奏の継承について、アレヴィー協会にはサズ教室が備えられており、アレヴィーの子供たちにサズを学ぶ機会を与えるのみならず、ジェムにおいて必要不可欠な音楽家を育成する場として、ディアスポラ・コミュニティでアレヴィーたるアイデンティティを保持する一助となっていた。

セマーの継承に関しては、複数人で行うものであること、習得手段が模倣に限られるものであることから、単独で実践できかつ模倣のほか楽譜などの習得手段の可能性のあるサズの演奏以上にその継承の場が不可欠となる。習得の場の一つはアレヴィー協会によって開講されるセマー教室である。ジェムの数が少ないディアスポラ・コミュニティにおいて、定期的にセマーを実践とともに習得することができる希少な可能性である。また、上演型のセマーを実践するためのレパートリーの習得も、継承の機会の一つということができる。

オーストリアでの新たな継承の場の可能性として挙げたのは、学校教育課程で開かれるアレヴィーについての宗教の授業である。その授業外活動として行われる「子供のジェム」とともに、トルコにおいては見られない可能性である。ジェムの回数が少なくなるとともに、子供たちがデイシュに触れる機会もまた少なくなっているが、「子供のジェム」の中でデイシュを含むアレヴィーの音楽を聴き、それが内包する宗教的な意味や事柄をその他の儀礼的な実践とともに自然と浸透させることで、子供たちに、デイシュを単なる「歌」としてではなく、その役割や動作も含めて理解し意識させることができる。

移民として「故郷」から離れそれまでにない環境で生活を送る中では、様々な障害によって、「故郷」では当たり前に行ってきたことの実践が難しくなることが多かれ少なかれ必ずある。オーストリアのアレヴィーも例外ではなく、彼らの場合にはジェムの実践、アレヴィー音楽の実践、次世代への継承の困難さとして現れている。一方で、オーストリアのアレヴィーは移民によって宗教的自文化表現の新たな可能性を得た例でもある。トルコでは、政治的環境によって、宗教的マイノリティであるアレヴィーの立場や自文化表現は度々危険にさらされてきたが、一方でオーストリアでは、アレヴィーの周辺環境や宗教グループとしての立場が一応の安定を得ているため

である。その安定した立場が、文化祭の開催などオーストリア生まれの世代による活動を可能にし、アレヴィーの「宗教の授業」や「子供のジェム」というオーストリアでの新たな可能性を生んでいる。これらの活動が移民による宗教的自文化表現の実践や維持を妨げる障害を乗り越え、移民コミュニティでの活動を補完するものとなり得るのかはまだ判断し難い。しかしこれらが、今まで行われてきた「アレヴィーの宗教的自文化表現」に投じられた一石となっていることには違いなく、その影響がオーストリアのみならず彼らの「故郷」にまで及ぶ可能性をも示唆されているのである。